

72 対馬暖流の寄せる岬

二月下旬の新聞に、土曜日に調査中の遺跡で現地説明会を開くという記事を見つけた。「本郷山崎遺跡」というりっぱな名をもらったその遺跡は、平成の合併で広くなった市内にあるという。去年の秋に弥生遺跡にまつわるある発見をしてから、意識は遺跡ということばに敏感に反応する。ドライブがてら見学に出かけた。

広域農道と称して農林水産省のつくったその名も「みのりロード」というバイパスが、市の西部の山すそを横切って西へ伸び、隣の市との境界まで通じている。人口が2000年から1万人ばかり減って今年3400人をわりこんだ市のことから、通行する自動車はわずかしかない。国道191号線よりも快適に走れる道だが、地図にはこっそりとしか載せられていない。こんなおかしなありさまになったこの国の古代はどんな時代だったのだろうか。今日は、岬の小さな田園で見つかった遺跡へ行って探してみようと思う。

バイパスを途中から北側の山地に向かうと、この一帯を東西につらなる山々が急な斜面をなして日本海に落ちこむ。強い風が吹き寄せる山には、風力発電のプロペラが回っているのが見える。海岸は荒波にけずられた岩の崖が多く、浜辺があってもほとんど石ころばかりだ。そういう岩場の一か所に

竜宮の潮吹と呼ばれてきた場所がある。荒波が打ち寄せる日には岩のすきまから潮が噴きあがることからきた名だ。竜宮のかたわらには小さな漁村がある。日本海側にはもう二つ、そこと同じように山にへばりつくようにして漁村がある。田畑の多くは山の中にあちらこちらと切り開かれていて、そこにもまばらに家々がある。走ってきた広域農道はそういう山の中を通っている。

やがて、こういう地形がいったん狭まると、ふたたびふくらんで、同じような地形をして西にはりだした岬になる。地名は向津具（向かつくに？）。先ほどあげた漁村の一つはこちらの岬で外海に面しているが、岬の南側は外界からの波風をさえぎられておだやかな湾をなす。古老がむかし戦艦陸奥が入ったことがあると語るこの湾は、大きくて奥深い。今の市は合併によって古代の国郡制の郡にもどったのだが、大津郡という名は、郡の東部にある仙崎湾とこちらの油谷湾のどちらにちなむのだろうか。今から行く初期弥生時代以来の遺跡からすると、こちらの湾の方に重きが置かれたのかもしれない。岬に入ってからの中の道は、農地は少なくとも農免道路。国土交通省管轄の道路から外れるけれども、一般道路の代役を果たす重要な道である。

狭い地域のことをこと細かに語るのは、古代と比較する基準として現在の状況を知っておくためである。農免道路は下ってゆき、やがてこの岬でただ一か所低地にある田園に着いた。調査中の遺跡はこの平地にあるはずだ。じつは、ここに

来たのはわたしも初めてである。30分で着くだろうと考えて出発したが、もう予定されている時間だ。向こうに人だかりのしているところがある。近づいて路肩に車を停めてそちらへ行く。ちょうど県の埋蔵文化財センターの人が説明を始めたばかり。

説明を聞きながら周囲を見渡しても、ここはそれほど広い平地ではない。表土を削りとして発掘している数枚の田はその田園の中ほどにあり、道を挟んだ北側の山際に沿って住居がある。四十人ばかりの見学者が立っているところには、たくさんの土坑跡がある。どういう用途だったのかよく分からないという。東側に幅5mぐらいのトレンチが掘ってある。水路だったようで、発掘者たちは大溝と名をつけていた。大溝には二つの穴が掘ってあり、そこから相当の量のどんぐりが出てきたという。流水であく抜きをしたものらしい。この大溝から弥生時代のさまざまな生活用具が出てきました、それはあとで見せましょう、と考古学の徒である説明員が話す。大溝の、地層と出土状況を保存するために掘り残された部分には、まだ土器の破片が見える。

話の途中で東の方を指さしながら、ここからは見えませんがあちらで、弥生時代中期の有柄銅剣が出土しました。明治時代、大雨の日に五輪塔のあった斜面が崩れて出てきたそうです、という説明があった。この有柄銅剣がこの土地に注目が集まる大きな要因である。わたしも、新聞に書いてあった

説明に認識を新たにして来たのである。一体に形成され、刀身の手元に垂直に張り出した部分をもつ有柄銅剣は、日本で四本しか出土していない。あとの三か所は、福岡県糸島市三雲南小路遺跡、佐賀県吉野ヶ里遺跡、唐津市柏崎遺跡。ここ本郷山崎遺跡の有柄銅剣は、前二か所から出土したものと同型である。糸島市の遺跡群や吉野ヶ里遺跡は、規模が大きく出土物も多い。この岬でそこと同格の剣が出土したというのは驚きである。もっとも、五輪塔は平安時代末期から現われる墓石の形式だ。もし有柄銅剣が五輪塔の下にあったのなら、伝世品である可能性が高い。必ずしも、弥生時代からこの土地にあったとはかぎらないだろう。ほかに青銅器が出土しないのも、この土地で青銅製の武器を携行したという見方を困難にする。

しかし、班田収授の行なわれた奈良時代に、この土地に条理制が実施された痕跡があり、発掘調査が行なわれている田の下から、奈良時代の都ぶりの須恵器の破片も出土しているという。さらに、出土物の中には中国宋代の青磁の破片もある、鎌倉・室町時代ここは荘園で、管理者の屋敷がこのあたりにあったのだろう、との説明である。ここは弥生時代初期からけっこう重要な場所だった、と発掘者たちは考えているようだ。荘園といえば、先ほど記述した日本海側の山並みの南側、油谷湾の奥の広い田園に日置という地名が残る。『和名抄』で長門国大津郡に日置荘の名が出て、律令の時代から大津郡西部は大きな荘園だったと考えられている。向津具の

岬もその荘園に含まれるようになったらう。

発掘現場での説明が終わると、出土品を見るために中学校の敷地に置かれた保管所に移動した。そこで中学校はすでに閉校されていることを知った。がらんだ校舎だけが残っていて、さびしい現実を確認させられる。さて、出土物は二つの長テーブルの上に展示されていた。展示品に青銅器はない。石器と土器の数も多くないが、弥生時代初期の生活を垣間見せてくれる重要なものはだいたいあったと思う。縄文様式の土器と弥生式の壺や煮炊きの土器がある。石器も、石鎌・二、三種の斧・稲穂を摘んだ石包丁など必需品と思われるものはあった。また、サヌカイトのような加工用の石のかたまりも。福岡都市圏の遺跡で見られるのと同じ様式の土器、大分県姫島産の黒曜石や讃岐の石は、弥生時代初期から、この岬も交易のネットワークに参加していたことを教える。それに、弥生人の人骨が多数出土した土井ヶ浜遺跡は、ここからそれほど遠くない。

発掘者たちは、本州西北端にあつて南に大きな湾を擁するこの岬が、日本海沿岸を東に向かう航路の中継地の役割を果たしたのだらう、と考えている。たしかに、関門海峡を通る九州北岸と瀬戸内海を結ぶ主要な交通路からはずれてはいるが、関門海峡より北に向かつて、山陰道に進む航路はこの岬の沖を通るのである。そして、よい港の少ないこの航路で、遺跡のある場所の南には嵐を避けることのできる入り江が

ある。交易のネットワークがあった古代にも、ここが一定の役割を果たしたであろうことは理解しやすい。

そのうえここは、日本列島の北側を東流する対馬海流が本州西北端にぶつかる場所だ。土井ヶ浜遺跡の多数の人骨は縄文時代人よりも身長が高く、大陸系の人たちだったであろうと推定されている。朝鮮半島で栽培されている稲よりも寒さに弱い日本列島の稲は、長江南の越の地域からもたらされた蓋然性が高いが、そういう稲の種をもって九州北部に来た人たちは対馬海流に乗って来た、とわたしは推測する。土井ヶ浜遺跡を残した人々は、中国大陸から直接来たのではないにしても、九州北岸の大陸系の人々と同じ系統である確率が高いだろう。本州西端の土井ヶ浜遺跡やここ本郷山崎遺跡の人々は、そういう文化をもった人たちだったと想定してよいだろう。

それにしても、石の矢じりや縄文式の土器もまじる出土物からして、弥生時代初期ここに住みついた人々は、十分豊富な資材を携えてきて生活を始めたのでないことが分かる。大溝の穴で見つかったどんぐりは見た目にも形が判別できるほどだったが、そういうものも食料にする必要のある生活程度だったのだ。初めは人の数も少なく苦勞しながら集落をつくっていったのだろう。そんな狭い土地が地理のめぐみのおかげで栄えるようになり、有柄銅剣も伝来してきたのだろう。やがて、条里制がしかれるほど田園は広がり、人も増えたの

だ。中世には宋の青磁を使うような地位の人も住む場所になった。その地位は、土地からの上りだけではなく交易の利益もあって支えられたのだろう。

五輪塔は有柄銅剣が出てきた場所だけにあったのではない。この田園のすぐ南の漁村には二尊院という名の小さな寺があり、そこにも五輪塔がいくつか立つ墓がある。あの楊貴妃はここに流れ着いたという伝説のある墓だ。元は大きな寺だったらしい。鎌倉時代の阿弥陀如来と釈迦如来の二つの仏像がある。大きくはないが、国の重要文化財に指定されるぐらいに丁寧な出来だ。楊貴妃供養のための二尊像として京都にあったが、貴妃の漂着地にもたらされたと語る寺伝があるらしい。この岬は、対馬暖流の寄せる位置にあるから、九州北岸を航行する大陸の船が風に流されて来るということが何度か起きたと考えてもおかしくないだろう。楊貴妃伝説の生まれる地理的な条件は具えているのだ。

あれこれ考えていると、中世までこの岬で、人々がまんざらでもない程度に暮らしていただろう、と思えてくる。家に帰ってグーグル・マップの航空写真でこの平地の広さを調べたら、長いところで東西がおおよそ 1.4km、南北は 500m 足らずしかない。それも、外周はへこんでいて長方形からはほど遠い。広めに 60 町歩 (1 町≒1 ヘクタール) として、古代の米の収穫がどのくらいか分からないが仮に 1 町歩あたり 20 石 (1 石≒150 kg) あったとすると、ここの平地で 1200 石ばか

りということになる。古い単位を使用していることにあきれないでほしい。江戸時代に土地が養うことのできる人口を知る目安として米1石で1人とされていたのを参考にして、ここにどれだけの人が暮らしていたかを見積もろうとしているのである。周辺の土地は、江戸時代ほど開墾されていなかったから、この岬の収穫をそれほど増やすことはなかっただろう。現在ここには漁業を主要な生業とする集落が四か所ほどあるので、この岬の生活を支えるのに漁獲が一定程度の寄与をしたと考えることはできる。しかし、中世までこの岬で農業や漁業で生活できた人の数は、多めに見積もっても2000人足らずということになるだろう。

比較のために、現在どれだけの人がこの岬に住んでいるか、市のインターネット上の情報を調べてみたら、上と下の向津具に954世帯・1784人だった。人口減少の著しい現況は中世に近づいているようだ。もっとも、社会の構造は大きく異なっている。今では、漁村の人々の生活は漁業だけで支え切れないし、農業に至っては生活費の小さな部分しか補充しないだろう。多数が高齢者の住民は、雇用されたりさまざまに工夫したりして現金収入を得ているはずだ。ちなみに、遺跡調査が行なわれている本郷・山崎地区には45世帯・101人しか住んでいない。弥生時代初期、この人数で、出土したほどの遺物を作り出すことは無理だったと思う。遺跡を残した人々の数よりも少ないだろう。

このように古代と比較してみると、現在、この岬の社会は、農業と漁業を基盤とした中世よりも脆弱で、けっして楽ではなかったであろう弥生時代の生活と比べても、ずっと勝っていると断定することがむずかしいほどだ。かつてはあった地理上の優位さも、交通運輸の変化によって失われている。身近な例によって、日本の農山間地域と小さな漁村がどれほど衰退に向かっているか実態を知ると、うすら寒くなる。一次産業がこれほど衰退しつつある社会で、ほかの産業も活動の場が狭まっている。そして、平均的な水準の生活を維持していける見込みが少ないので若い世代はしだに退去していく。それを示す景観は目に見えて広がって、手をこまねいてはおれないほどだ。困難でも、農林水産業を主体としてきた地方で、職の配置を機能するように変更し、経済構造を変えていかなければならないのに、国や市の政治の担当者は、掛け声だけは美辞麗句・大言壮語だが、中世の荘園を管理した武士ほどにも知恵をしぼって施策を実行しているようには見えない。彼らは、打開の道を見つけられずに困っている人々の苦境をほんとうに理解しているだろうか。

古い時代の遺跡を見学に行くと、現在の日本国の、自分の住んでいる市の苦境をいよいよ教えられた。この市では、せめて観光客を呼び寄せようとする程度のアイデアしか目につかない。たとえば、楊貴妃伝説のある墓と二尊院の方には、二十数年前に楊貴妃の像が建てられた。その像は、中国大使の揮毫までお願いして、かの貴妃が果てた馬嵬に立つと

いう像と同じ大理石でつくられている。もう一つの竜宮の潮吹の手前では、赤い鳥居がうねうねと続くようになったのを、CNNが日本の景観三十か所の一つに選んだら、最近にわかに観光地になったが、市は、観光客がバスの乗り入れに苦勞する狭い道を改良することに追われている。以前からの集客地である青海島や四か所の温泉に来る観光客はめっきり減った状況下で、由緒ありげな名をつけたお稲荷さんに観光客がいつまで来てくれるか心配である。

帰途は眺めのよい油谷湾沿いの道を走り、楊貴妃の里のそばを通った。まだ早春の道に観光客の車は走っていない。

2018年、3月記す

2018年、7月清書

対馬暖流の寄せる岬